藩祖毛利輝元が築いた白亜の城郭

萩　城　址

周防・長門の藩祖となる毛利輝元は、安芸国吉田の郡山（こおりやま）城を本拠地としていました。当時は山城が主流であったとはいえ、山間地では出兵も経済活動も不便なため、輝元は豊臣秀吉がつくった聚楽第を参考に瀬戸内海に面した広島に平城をつくりました。広島城（アーカイブス参照）は地盤がやわらかい砂地の三角州であったため、島普請といわれるほど難工事でしたが、工事開始から２年となる天正 19 年（1591）に入城したと言われています。しかし、関ヶ原の合戦後、輝元は十年余りで広島を明け渡し、新たな城を防長につくらなければならなくなりました。

慶長８年（1603）、山口に入った輝元は城の候補地を幕府の薦める萩にしましたが、萩も広島同様の阿武川河口の三角州で低湿な土地でした。翌年からの城普請で資材は阿武川流域の木材と指月（しづき）山をはじめとした萩周辺の花崗岩が利用され、基礎となる石垣建設には、大津の石工集団「安生衆」が呼ばれたそうです。この年の 11 月、輝元は未完成のまま入城し、藩体制を固めていきます。

指月（しづき）山麓に築城したことから「指月城」とも呼ばれた城郭は、山麓の平城と山頂の山城をあわせた平山城で、山麓に本丸・二の丸・三の丸を、山頂に詰丸（つめのまる）（要害）を備えていました。指月山は日本海に突き出すような地であり、二の丸の東・西側は海に面していました。本丸は桃山時代初期の様式で、高さ 14.5m の白亜五層の天守が、文久３年（1863）に藩庁を山口に移すまで 260 年間、毛利 36 万国の居城としてその威容を誇っていました。残念ながら明治７年（1874）の廃城令により建物は天守をはじめ櫓 14 棟、門４棟、武具庫３棟が解体され、現在は石垣のみが往時をしのばせています。

萩の三角州の北東端にある浜崎地区は萩城下町の建設にあたって開かれた港町で、廻船業や水産業で賑わった町です。藩主の御座船（ござぶね）や軍船を格納した旧萩藩御船倉も含めて重要伝統的建造物保存地区に選定されています。

天守台（東西約 20 m、南北約 14.5 m）
高さ約 10 m、白亜の五層の天守がそびえていた

■位置図

萩城跡指月公園

二の丸の石垣
萩城址の北側に菊ヶ浜が続く

国指定史跡「旧萩藩御船倉」
藩主の御座船や軍船の格納のため、萩城建築まもなく建設。現在は明治以降の埋め立てにより河岸から離れたが、往時は松本川に面し船が自由に出入りできる地であった